

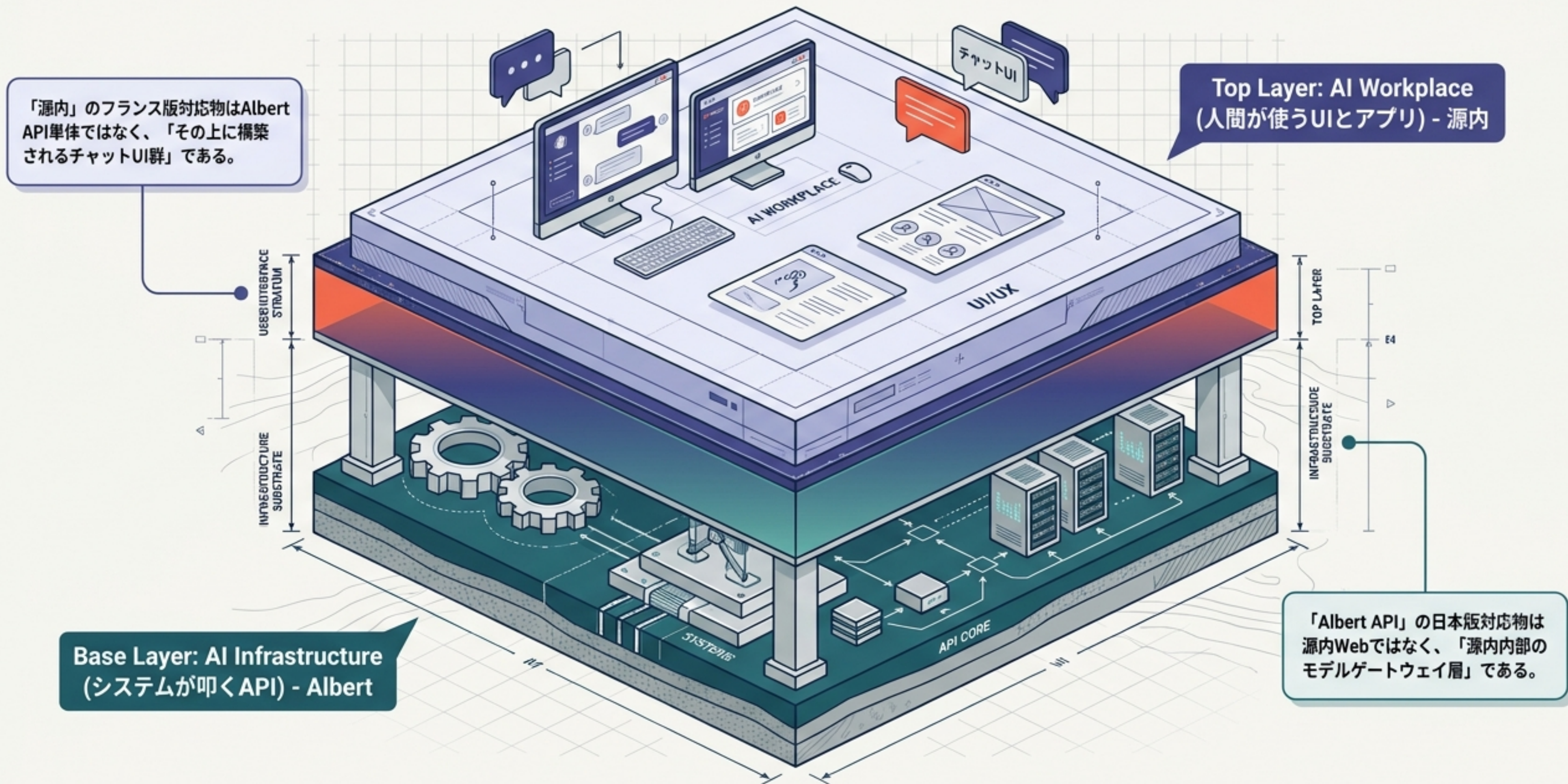


日本「源内」vs フランス「Albert API」： 政府AI基盤のアーキテクチャと国家戦略の解剖

デジタル主権、生産性、そして次世代インフラのグローバルスタンダードを探る

最大の誤解を解く：両者は「競合」ではなく、パズルの「異なるピース」である

源内とAlbert APIは同じレイヤーの製品ではありません。源内は全職員が直接触れる「AIワークスペース」を中核とし、Albertは行政システムが裏側で連携する「共通API基盤」です。



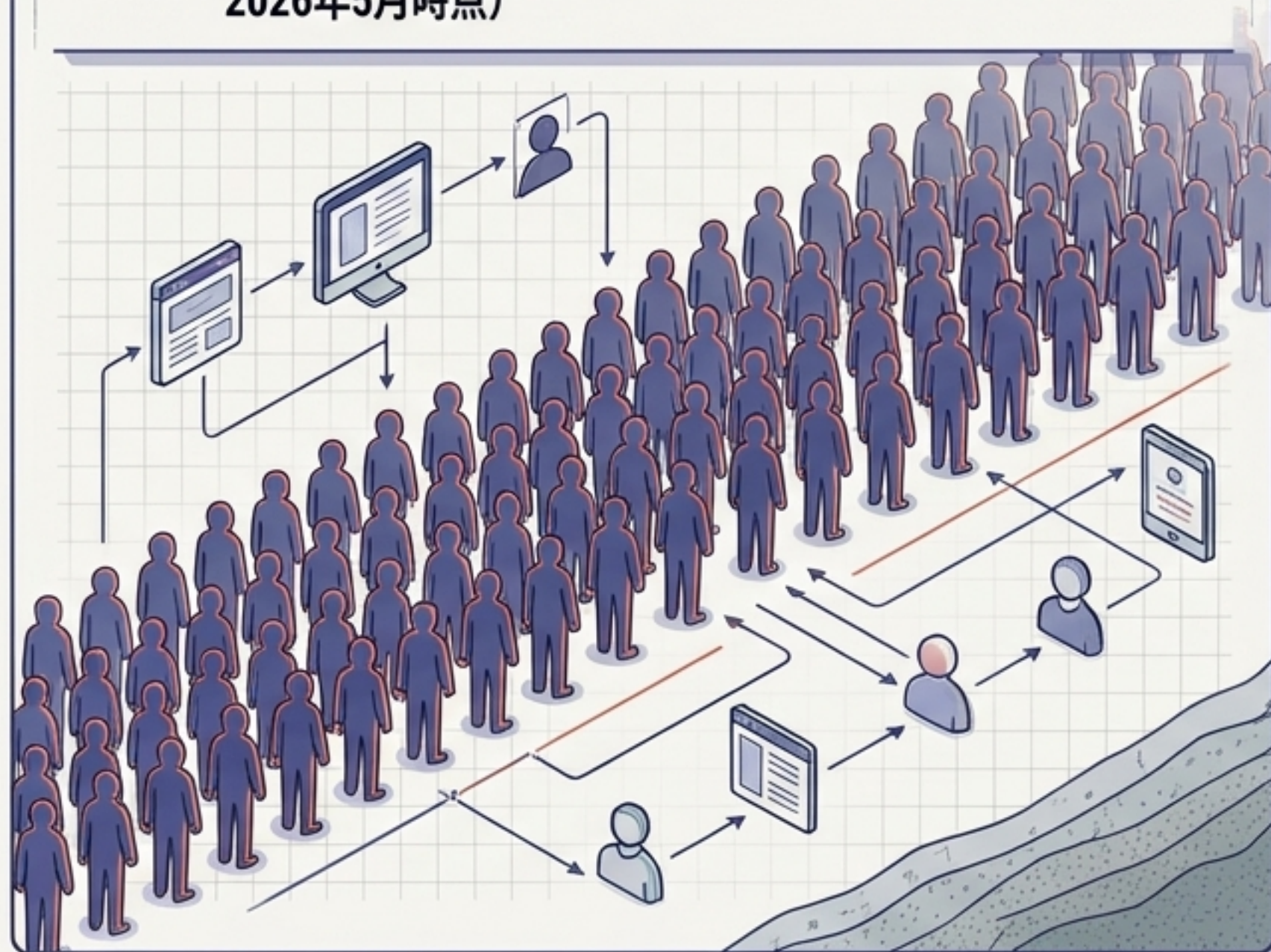
なぜ設計が違うのか：アーキテクチャは国家の政策目標に従う



ターゲットとスケール：人間中心の「源内」と、システム中心の「Albert」

人間中心 (Human-Centric)

- 対象：全府省庁 **約18万人**の国家公務員（2026年度 大規模実証）
- 実績：**1,280人**利用で累計**33万回超**の利用（デジタル庁内先行・2026年5月時点）



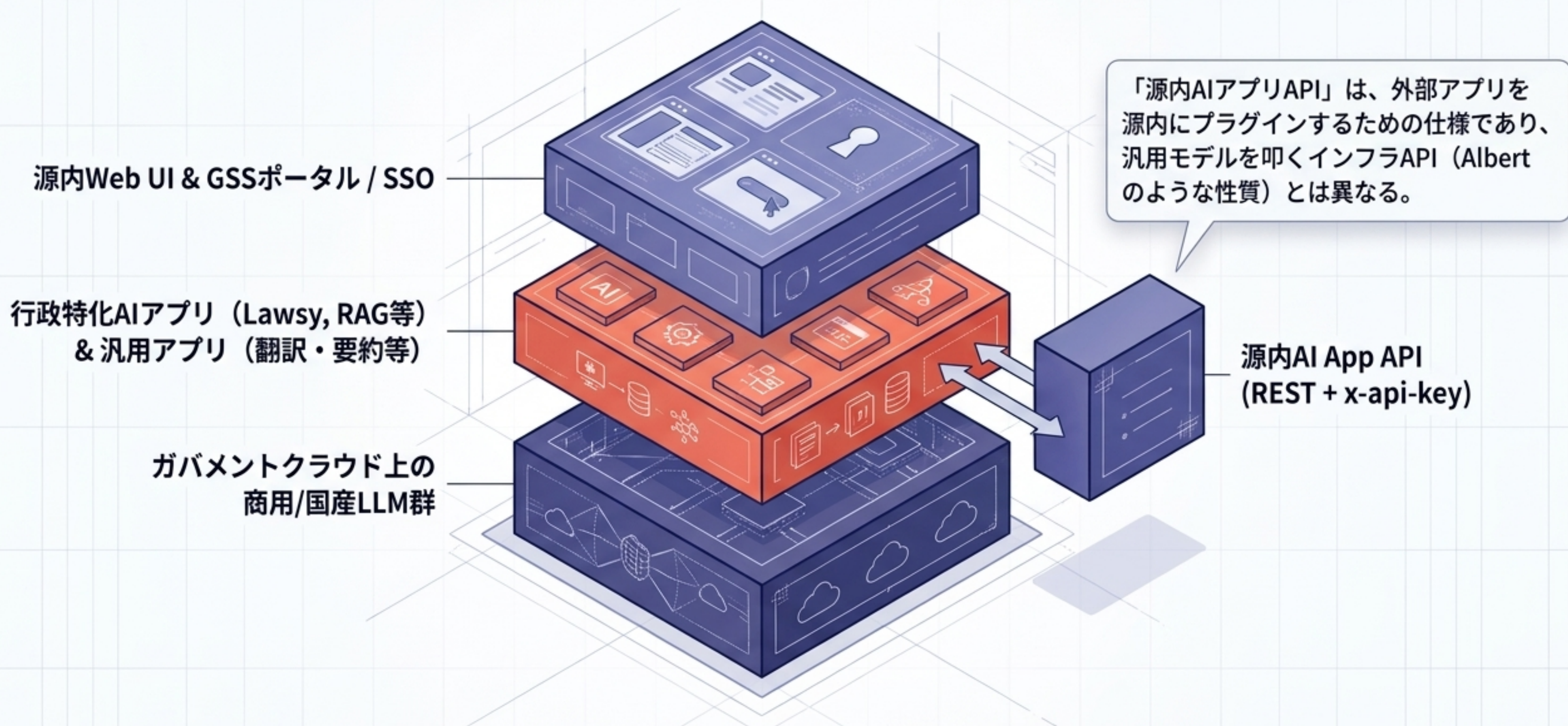
システム中心 (System-Centric)

- 対象：国家公務員・行政デジタルサービスに組み込まれるAPI
- 実績：**70超**の公共プロジェクトが連携し、**週10万回超**のAPIリクエストを処理



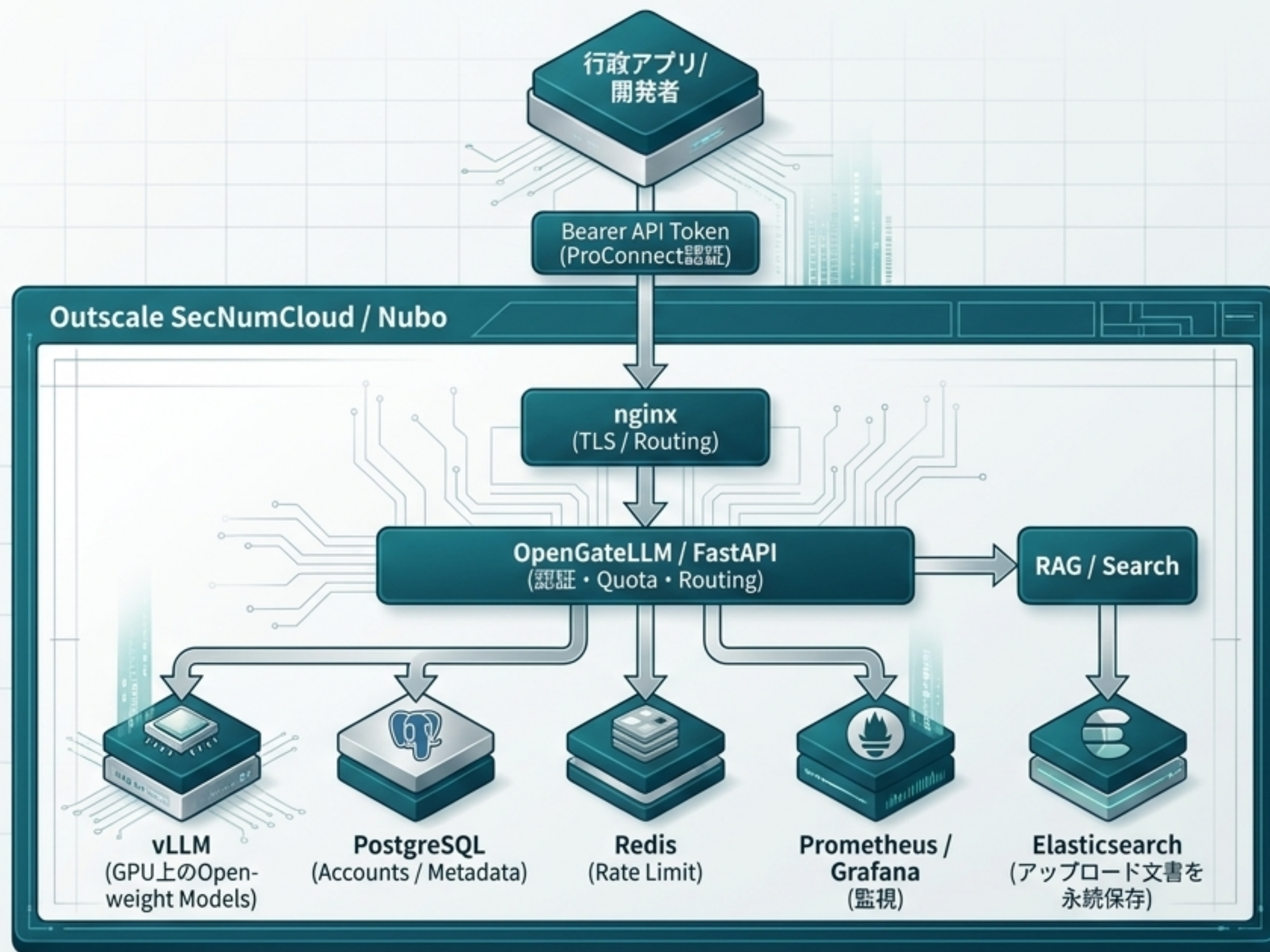
源内のアーキテクチャ：「完成した業務体験」を提供する強力なフロントエンド

外部のマイクロサービス型行政アプリを源内Webに統合し、職員に単一のインターフェースを提供。



Albert APIのアーキテクチャ：アプリとモデルを疎結合にする堅牢なゲートウェイ

OpenAPI 3.1・OpenAI互換。行政システムは特定のLLM企業に依存せず、主権的ローカル推論やRAGを安全に利用可能。



主要機能対比：どこにリソースを集中させているか

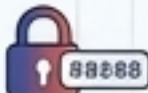
源内は「何を仕事として完成させるか」まで踏み込み、Albertは「開発者が機能を組み合わせるための部品」を提供する。

機能	源内（日本）	Albert API（フランス）	評価/特性
汎用チャット/UI	◎ 中核・完成アプリ	APIのみ提供	源内がUXにおいて優位
行政専用業務アプリ	◎ 中核的差別化要素 (Lawtsy等)	各行政サービス側で実装	源内が業務適用力で優位
公開標準API	AIアプリ連携用 REST	◎ OpenAPI 3.1, OpenAI互換	Albertが開発標準化で優位
RAG（検索拡張生成）	◎ 多数の専用アプリ内で 実装	API `/v1/search` として一般化	設計思想の違い (アプリ内包 vs 部品化)
モデルホスティング	商用クラウド＋国産LLM調達	◎ SecNumCloud上の Open-weight自前ホスト	Albertが主権インフラで優位

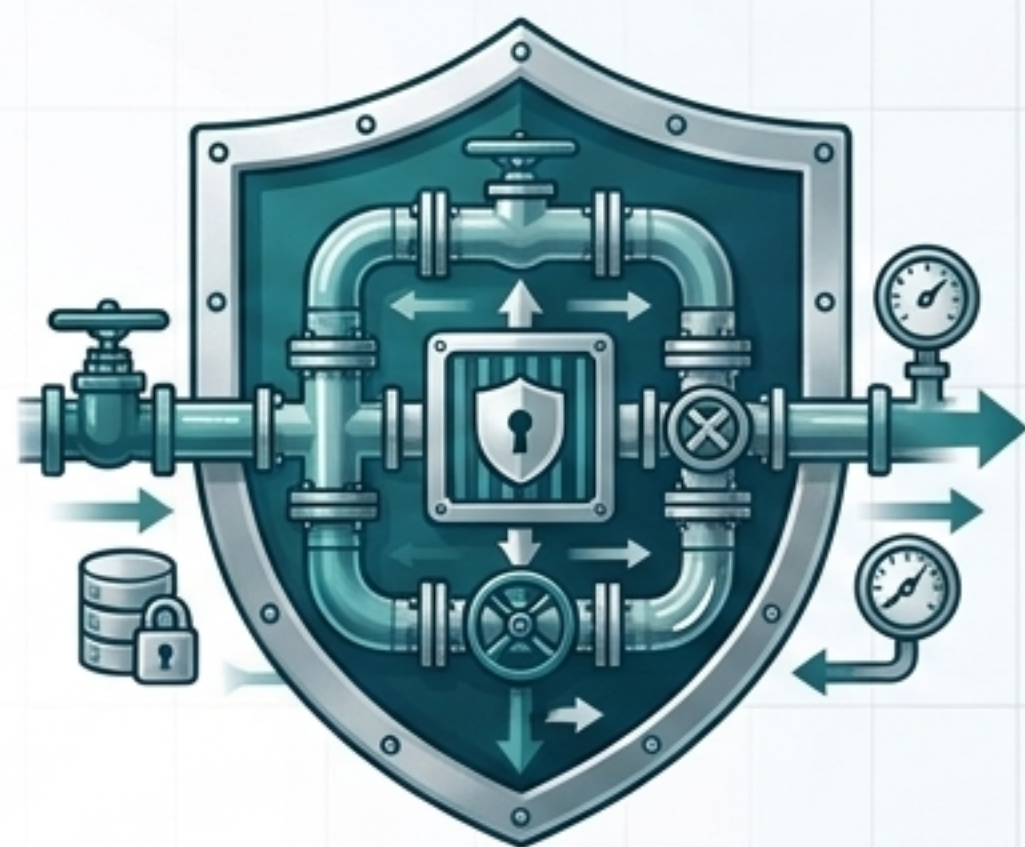
セキュリティの哲学：サプライチェーン防衛 vs データフロー制御



源内の強み：ソフトウェア供給網の防衛

-  1. GitHub Actionsのcommit SHA完全固定
-  2. Dependabotとsecret scanningの活用
-  3. 依存パッケージのminimum release age設定

コードレベルの脆弱性混入を徹底的に防ぐ、
行政OSSの先進的アプローチ。

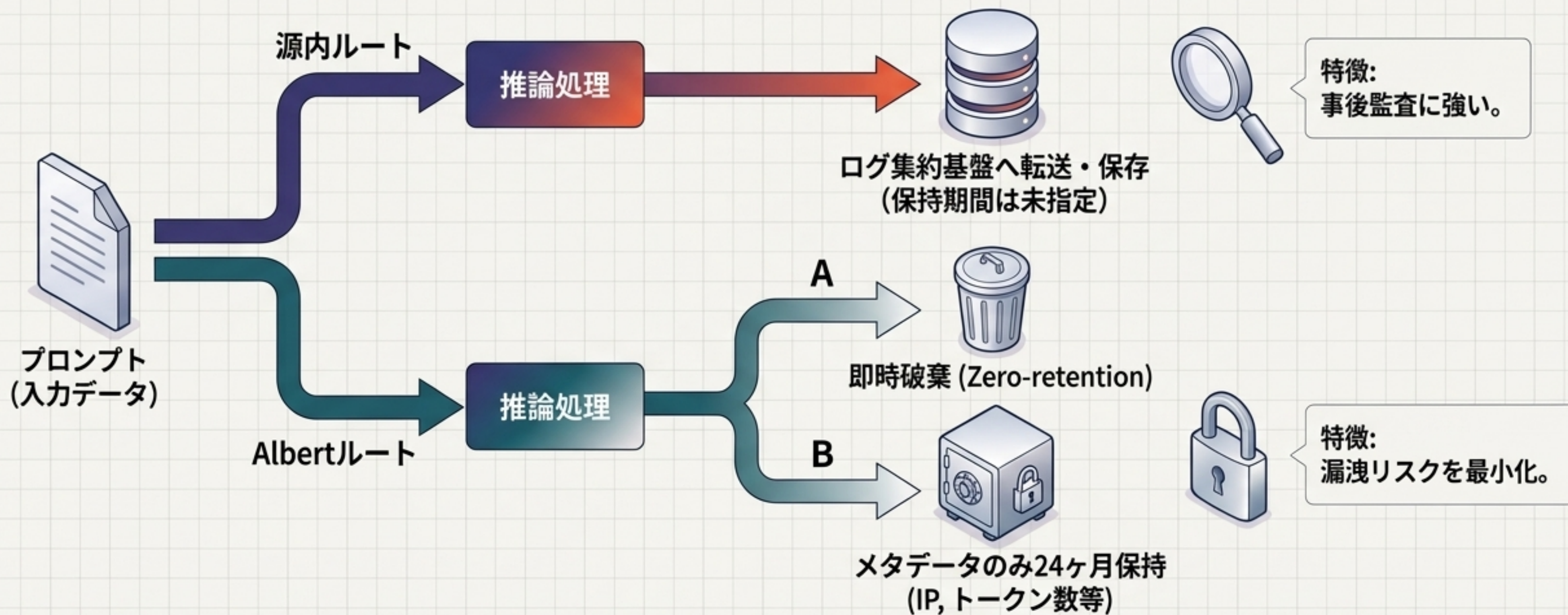


Albertの強み：データ流通の物理的統制

-  1. SecNumCloud適格環境での運用
-  2. nginxでのリクエストボディ非保存
-  3. vLLMのロギング無効化（本文をメモリ上のみで処理）

コンポーネント単位で「情報をどう扱わないか」を
技術文書で徹底的に制御。

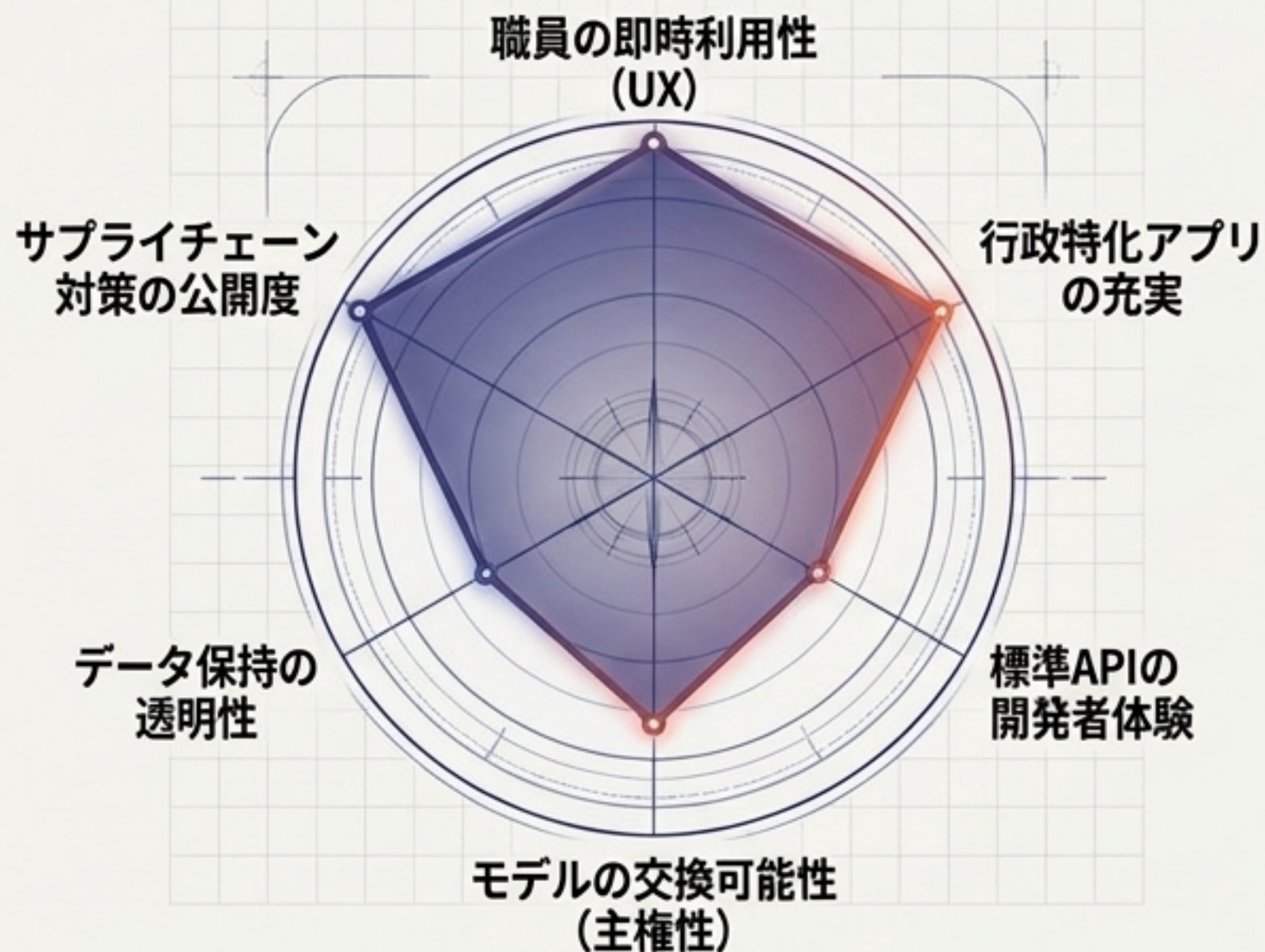
データライフサイクルのトレードオフ：事後監査か、漏洩リスク極小化か



インサイト: Albertは本文非保持によりプライバシー保護に極めて強いが、中央での事後コンテンツ監査は不可能になる。本文監査の責任は「呼び出し元のアプリ側」に委ねられており、高リスクな行政用途においてZero-retentionは万能の安全策ではない。

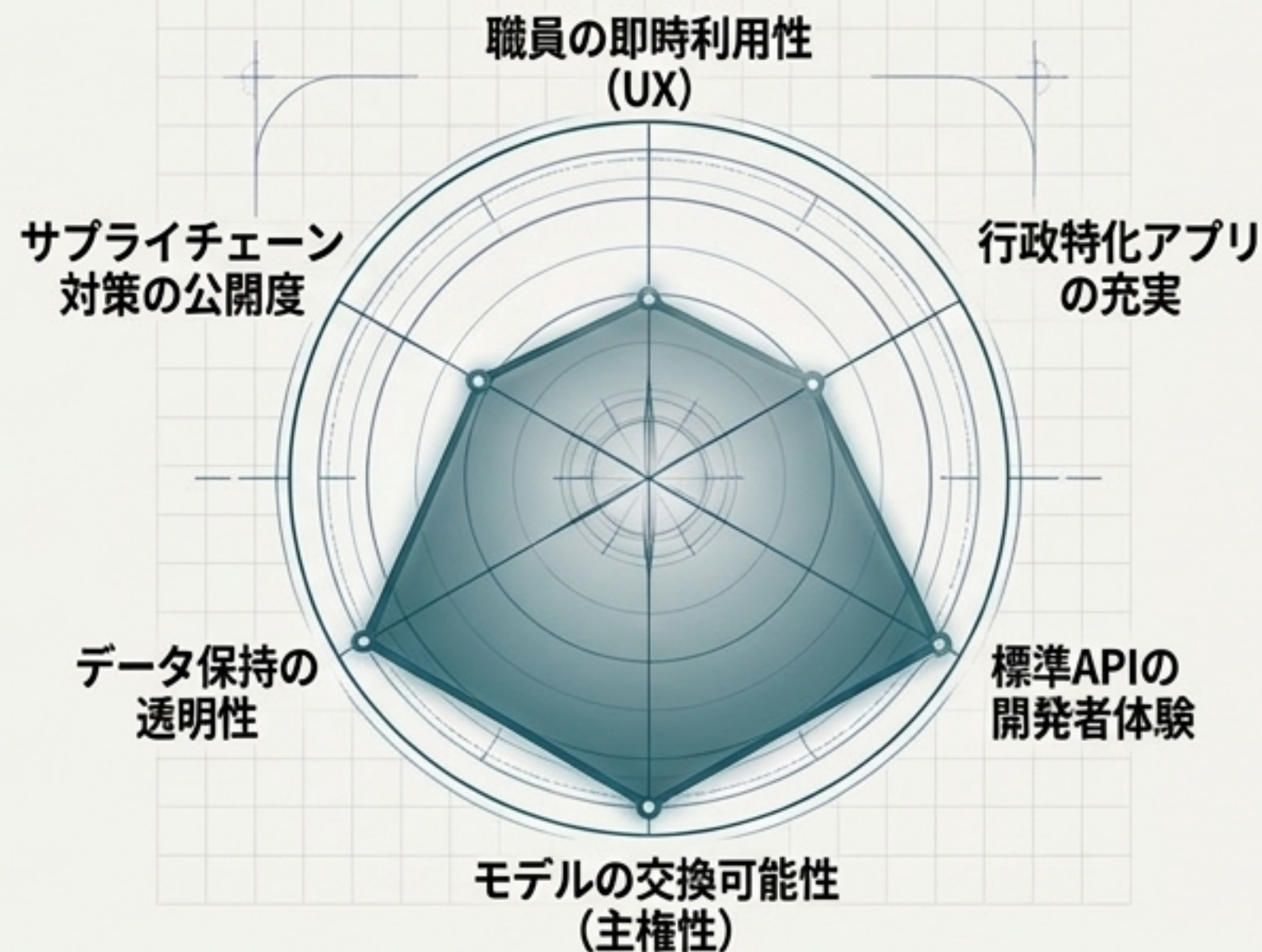
強みと課題のバランスシート

源内の評価



「一般職員がすぐ使える度 (UX)」や「行政特化アプリの充実度」は圧倒的。一方で、「汎用推論APIの仕様」や「データ保持・モデル別境界の透明性」に課題が残る。

Albert APIの評価



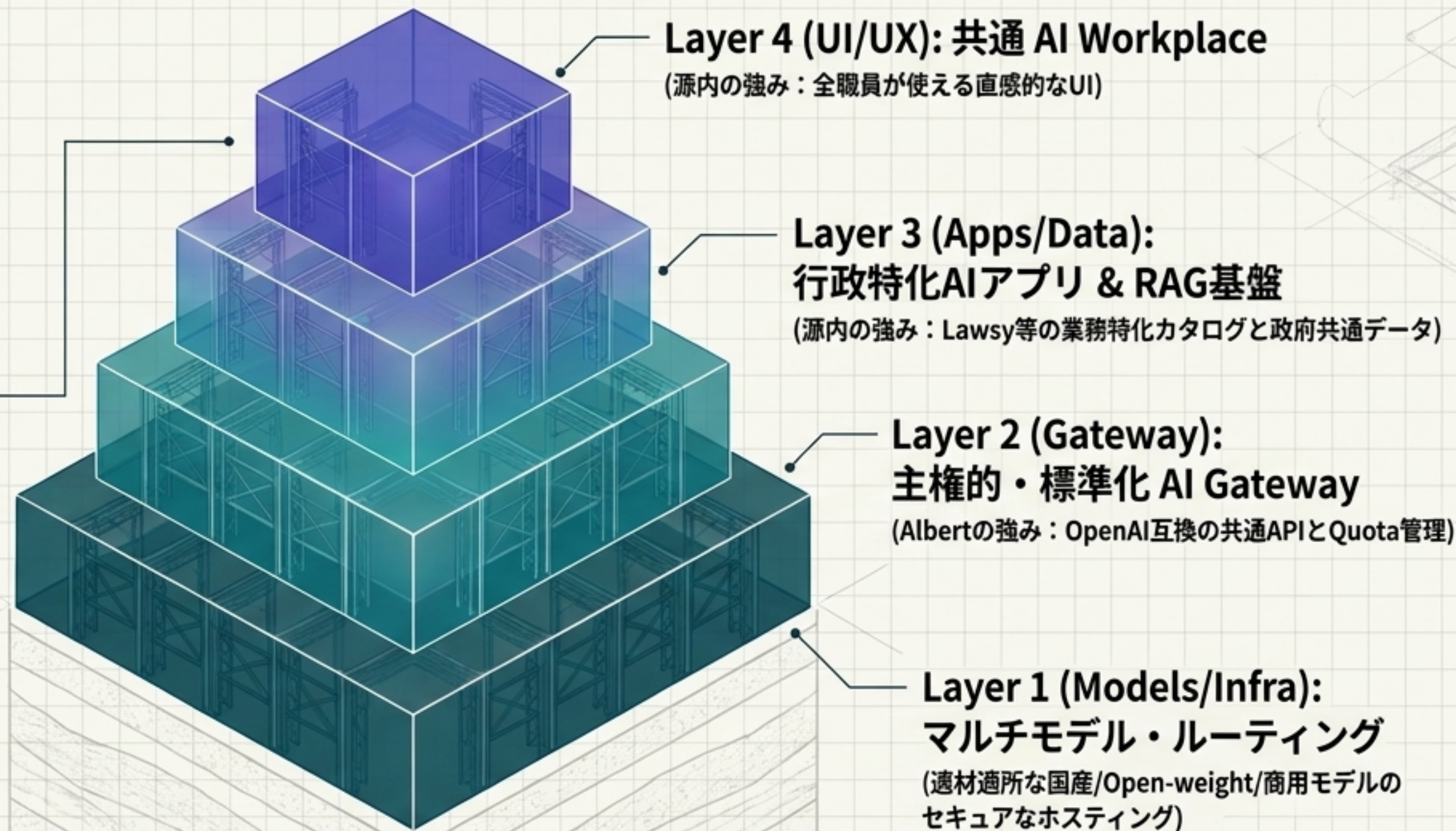
「開発者体験」と「ベンダーロックイン排除」、「データ保持の透明性」は極めて高い。しかし、「AIを業務に浸透させる最後の1マイル」を各行政機関に丸投げしているリスクがある。

シンセシス：日仏の思想を統合した「理想の政府AI基盤」

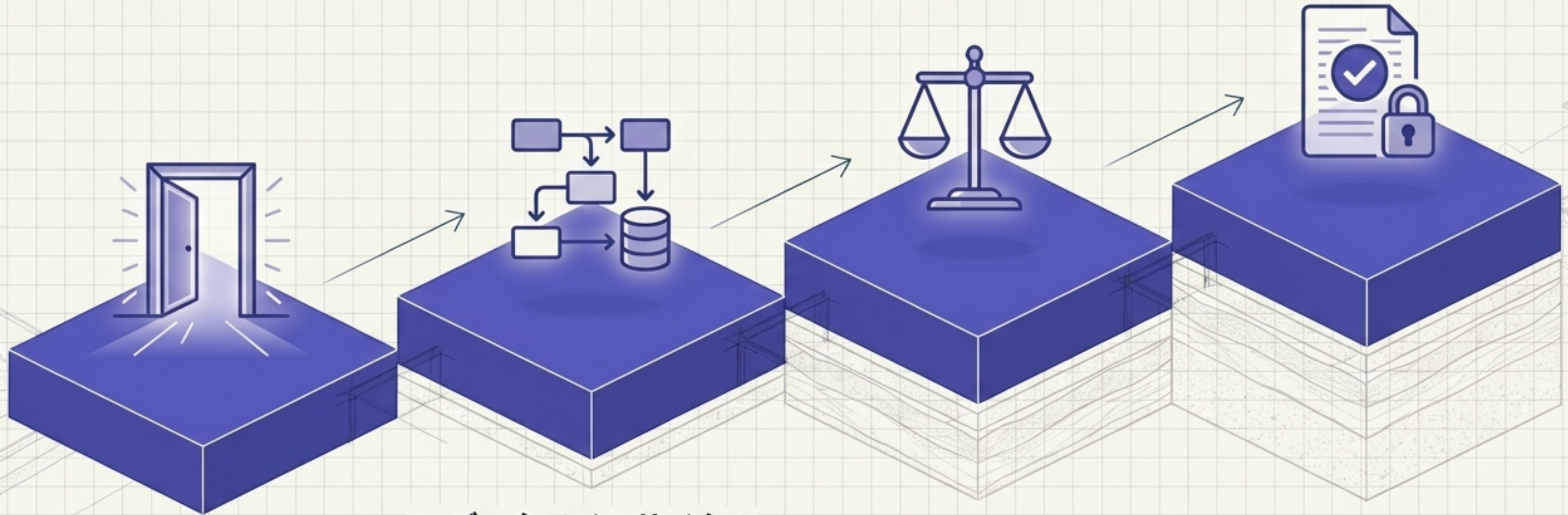
どちらかを選ぶのではなく、強固な主権的基盤の上に、優れた業務体験を載せるのが最適解である。

日仏の思想が活かされた AI 基盤

(適材適所な国産、国用所、鵜理士でなる理喫糞売の音を増縄造しにより基盤)



Action Plan: 日本のAI戦略を次のレベルへ引き上げる4つの提言



1. AI Gateway仕様の公開

行政アプリ連携用とは別に、モデルを抽象化する「OpenAI互換の共通API基盤（Quota、Token等のスキーマ）」を確立する。

2. データライフサイクルの透明化

プロンプトやRAG文書が「誰を通り、何日保存され、学習に使われるか」をモデル・コンポーネント単位で公表する。

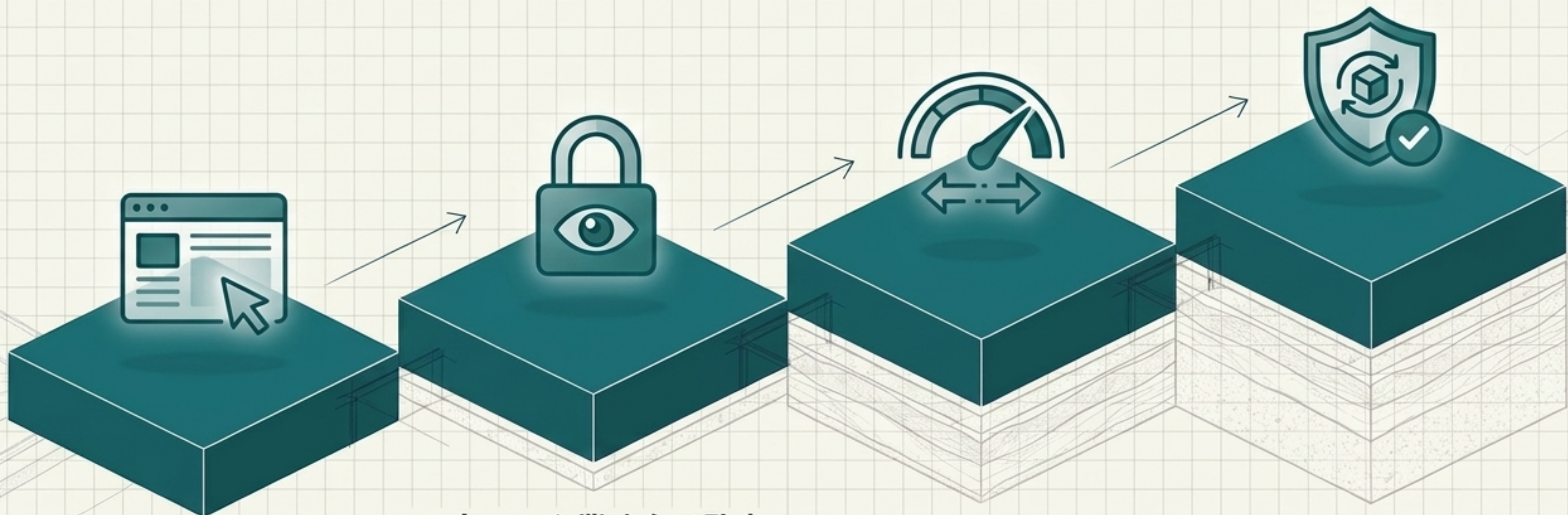
3. 客観的ベンチマーク継続

産業政策（国産優遇）に偏らず、行政タスクでの精度・遅延・コストを同一条件で継続評価する。

4. AI監査台帳の標準装備

エージェントAI時代を見据え、本文と分離した形でモデル・プロンプトのバージョンを記録する監査基盤を構築する。

Action Plan: フランスの共通インフラを真の「業務変革」へ繋げる4つの提言



1. 共通Workplaceの構築

API丸投げによる「省庁間のAI格差」を防ぐため、源内のようなUI・業務アプリ層を標準化し中央提供する。

2. 高リスク業務向け監査モード

AI Act対応のため、Zero-retentionの例外として「アプリ管理者のみ復号可能な暗号化短期ログ」のオプションを設ける。

3. SLAと安定性の公式化

70超の公共プロジェクトを支える基幹基盤として、可用性(99.x%)、P95レイテンシ、RTO/RPOの数値を明示する。

4. OpenGateLLMのLTS化

BETA段階の破壊的変更を抑え、エンタープライズ水準のバージョン管理と脆弱性対応の長期サポートを確立する。

結論：競争から、相互学習へ。

源内は「AI利用推進と組織変革」における世界的なトップランナーです。
Albert APIは「主権的データフローとAPI設計」の成熟したモデルです。

次なる競争軸は、単なるAIモデルの性能比較ではありません。
監査可能性、データ境界の透明性、そしてエージェント権限の標準化です。
両国が互いの思想を吸収し合うことで、次世代の
「グローバルな政府AI標準」が形成されます。